

2 0 2 5 年 度

私 費 外 国 人 留 学 生 選 抜

問 題 紙

小論文（日本語）

3 ページ

解答の書き方

1. 解答は解答用紙の所定の欄に、はっきりと記入すること。
2. 受験番号は、必ず解答用紙に記入すること。
3. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
4. 解答用紙には、解答と受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注 意

1. 監督者の「解答始め」という指示のあるまで、問題紙を開かないこと。
2. 「解答始め」の合図と同時に、解答用紙に受験番号を必ず書くこと。ただし、氏名は記入しないこと。
3. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、問題紙にページ不足・不ぞろい・印刷不良があるなど、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
4. 問題紙と下書用紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、各問に答えなさい。

コミュニケーションの三段階

文化におけるコミュニケーションについては、イギリスの社会人類学者エドマンド・リーチにならって私は大体三つのレベルがあると考えています。

ひとつは「自然」のレベルです。人間は物が飛んでくれば本能的によけるし、寒くなれば衣服を着る、おなかがすけばご飯を食べる。そういうごく自然とよべる状態は、どんな文化を通して変わらないだろうということです。私たちが世界のどこへ行ってもなんとなく生活できるのは、絶対的な人間の条件はどこへ行っても似ているからです。

どんな異なった文化を持った人々の間でも、ある程度共生ができて、ある程度意思が通じるといえるのは、人間としての共通の属性を持っているからだということがいえます。

ごく自然的なこととして互いに人間ならばわかりあえるような、誰でもだいたい理解できる形でのこうしたコミュニケーションの段階を「信号的なレベル」とリーチは言っています。

(中略)

そして異文化理解の二つ目の段階は「社会的」レベルです。社会的な習慣とか取り決めに知らないと文化を異にする相手も異社会も理解できないということです。

交通信号の表示の仕方を知らなかったら事故を起こしてしまうし、車を運転するアメリカ帰りの日本人がよくやってしまうのですが、いつのまにか車道を反対に走ってしまいます。右ハンドル、左ハンドルの違いというわけですが、アメリカやヨーロッパ大陸は左ハンドル、日本やイギリスなどは右ハンドルです。また服装では、いまや洋装を当たり前とする日本人男性にとっていまだにタキシードを着るのは不得手で、普通は持っていない人も多いし、日本国内ではめったに着ることもありません。結婚式のときに着るくらいのもので、ところが、アメリカやヨーロッパ社会に行けば、週末にはタキシードが必要なパーティーがあります。礼服の着用だけでなく服装については西欧の社会的な習慣や常識を知らないと間違えることがたくさんあります。

けれどもこうしたことは、例外はあるとしても人間が普通に育ってきて得られる常識のレベルで消化できる理解だと思えるのです。どの社会に行っても、一つの社会で培った常識的なことが取得できれば、インドに行こうがアメリカに行こうがある程度は間違いなくやっていける。わからないことでもその人に教えてもらってその習慣あるいは、社会的な規則を学習すればできるわけです。これをリーチは「記号的なレベル」というわけです。

このように、「自然的な」ことや「社会的な」レベルのことは、普通に育った人間ならだいたい対処できることですが、三つ目のレベル、これは「象徴」というレベルですが、これがまさに文化的な中心部のことで、外部の者にとってはきわめて理解するのが困難な世界なのです。

すなわち、その社会なら社会特有の価値なり、行動様式なり、習慣なり、あるいは信仰があります。信仰となると、たとえばキリスト教を信じている人には十字架は意味を持ちますが、信じていない人間にとっては何の意味も持ちません。社会のレベルまでは交通信号のようなものですから、その社会で生活する誰にとっても意味を持つことが多いわけですが、象徴のレベルになると、その価値とか意味を共有している人間しかわからないということになります。日本の文化でも、外国人にとってわかりにくいのはだいたいこの部分です。

(中略)

文化は翻訳できるのか

では、象徴的なレベルを理解するということ、言い換えれば、文化を翻訳するということは可能なのでしょうか。

私はかつてタイに行って、バンコクの僧院で半年ほど僧修行をしました。タイという国は一般的にいて仏教社会です。日本社会もおおた仏教社会です。

(中略)

しかし、実際僧院に入ってみると、仏教といっても、タイの場合はテラワダ仏教ですから、日本の大乗仏教とはだいぶ違います。戒律が中心で、僧侶は完全出家ですし、檀家の制度もあります。戒律を覚えて、頭を剃り、眉毛も剃って、黄色い衣を着て、一般の市民権も放棄して僧侶になる。そして一般の人たちは、僧侶には一段へりくだったところで挨拶しなければなりません。単に言葉だけでなく、身体的な、あるいは行動の規範からして一般の人たちとは違う文化的コードを持った存在として扱われるわけです。

(中略)

こういうことがわかると、タイ語で僧侶を意味するプラ（一般の有徳の存在）という言葉が日本語の僧と翻訳してしまうと、タイ社会で僧侶が持つ意味がほとんど消えてしまうことに気づくわけです。ですから、同じ仏教国といっても、仏教の系統が違うことも事実ですが、同時に、その文化の象徴としての仏教の信仰にこめられた意味もかなり違いますから、日本語とタイ語の言葉どうしの単純な結びつけでは翻訳不可能になってしまうのです。

文化の翻訳というのは、一つの文化の象徴的なことをいかにわかりやすく他の文化に伝えるかということが中心であって、必ずしも言葉を逐語的に訳せば理解できるというものではありません。その場合には言語と非言語の両方のコミュニケーションの仕方をあわせて考えなくてはならないのです。タイの僧侶のまとう黄衣がどんな意味を持つのかといったことも含めて。

リーチが言っているように、非常に複雑な理解への段階をふんで文化のコミュニケーションというのが行われているわけですから、それを一つ一つたどることを意識しながら、異文化を理解していく必要があるということです。とくに象徴的なレベルは、私たちが考えている理屈とか常識がなかなか通じない世界であって、通じないと同時に、その文化特有な現象として現れてくる、その特有な現象がその社会では大きな価値を持っていることを理解しなければなりません。これは再三強調したい点です。

速い情報と遅い情報

情報化社会と盛んにいわれていますが、私たちが注意しなければいけないのは、情報には二つのタイプがあるということです。それは「速い情報」と「遅い情報」です。情報と異文化理解というのは意外と難しい関係にあるのです。つまり、異文化については常に情報は流れると仮にしたところで、ほとんどの場合、それは速い情報として流れます。特にテレビを中心としたマス・メディアの世界では、アメリカといえば国際的な政治問題が起きるとホワイトハウスがぱっと映されますし、経済となるとマンハッタンの街をゆく人たちといった風景、中国では政治だと天安門、経済だと上海の賑わいなどが情報として流される。しかし、そこで実際どういう政治が行われ、経済が動いているのかとなると、速い情報だけではどうにもなりません。マス・メディア時代に私たちが日常の中で情報として受け取っているのはほとんどが速い情報なのです。実は異文化理解、特に異文化とのコミュニケーションをはかる場合には、遅い情報に注意を向けなければならないと思うのです。

どうして遅い情報かといいますと、先ほど述べたように、それが象徴的なレベルの現象とからみ合って、一見したところでは、その情報の意味がはっきりわからないことが多いからです。即断的に理解できる情報と、その情報の意味を理解するのに非常に時間がかかる情報とが存在するということです。情報を運ぶ手段は非常に速くなりましたけれども、その情報が理解される時間には依然として長くかかるものがあるのです。

(出典：青木保『異文化理解』(岩波書店、2001年)より一部抜粋。ただし、出題に当たり、一部を改変した。)

- 問 1 筆者は異文化理解の段階をいかに区別し、どの段階にいかなる困難を見出しているかを説明しなさい。(200 字以内)
- 問 2 筆者は、そのような困難を克服して異文化理解を深めるために、いかなることが重要であると論じているかを説明した上で、あなたは異文化理解を深めるためにどのようなことが重要であると考えてるかについて論じなさい。(400 字以内)